



狸小路

はじめに

皆さんは、「ブランド地名」という言葉を「存じでしょうか？ 簡単にいえば、名づけると「不動産が高く売れる」または「集客に役立つ」などという利点が生まれる地名のことです。

例えば「銀座」を例に挙げると、東京の銀座が本家なのはいうまでもなく、『角川日本地名大辞典13 東京都』によると、「モダンな繁華街の代表として有名になり、各地に銀座名を付した商店街が多く」、500余もあるといえます。

石丸雄司著『私の銀座風俗史』によれば、東京に近い関東に集中して350カ所もあり、東北方面に多くて、西は少ないそうです。また、石丸氏にいわせると命名の理由は明白で、××商店街と称するより、××銀座の方が良い響きなんだそうで、つまり商店街の代名詞が銀座だというわけです。

『地名崩壊』の著者である今尾恵介氏にいわせるならば、「やはり町一番の目抜き通りに銀座の称号は与えられるのだ

ろう」となり、私も同意見です。

さて、ブランド地名ではなく、銀座ほどでもないですが、やはり全国各地に見られる（もしくは「見られた」）街路名として「狸小路」があります。

狸小路

狸小路というと、一番先に思い浮かべるのが、札幌の狸小路ではないかと思えます。ここは、札幌一番の目抜き通りにも関わらず、なぜか銀座ではなく狸小路と命名されています。

私は横浜が地元なので、札幌よりも横浜駅西口にある狸小路を先に思い浮かべてしまうのですが、最近再開発された横浜駅ビルTHE YOKOHAMA FRONTの足元に、奇跡のように残された昭和の空間で、せまく短い路地に飲食店がひしめくように並んでいます。

新橋の狸小路

東京都港区の新橋では、新橋駅の東口に現在の「新橋駅前ビル」が建つ前は、狸



新橋駅前ビル1号館（東京都港区）

小路と呼ばれた飲食街がありました。新橋駅前ビル1号館の入口前には、「開運狸」と命名された狸の像が立っており、そこにはおおよそ次のような由来が刻まれています。

「江戸時代の新橋は狐・狸・狼が出没



横浜の狸小路（神奈川県横浜市区西）

するような所だけでも道が沢山あり人はよりつかなかった。明治時代になり鉄道建設の為此の近辺の開拓に当たったところ、狸の巣があり子狸が三匹も見つかり、作業員が餌を与え、三つの小屋を作つてあげたと云う。その場所が丁度このビルの所でした。子狸がどこかへ行った後残された狸小屋に人が集まって酒を飲んだりしたのでその辺りに飲食街が出来、これを「狸小路」と称する様になった」

この新橋の狸小路の由来については、本稿の最後にもう一度触れますが、その前に各地の狸小路について、その始まりを見てみたいと思います。

札幌の狸小路

さて、まずは最も有名な札幌の狸小路から見てもみましょう。現在の札幌狸小路は、南2条と南3条の中通で西1丁目から西10丁目まである横長の街区となっており、その歴史は札幌開府までさかのぼります。

明治維新後の明治2年（1869）に開拓判官 島義勇の指揮の下、札幌の建設は始まりました。この草々時代、狸小路の発祥地は、まだ草深い街はずれにすぎませんでした。

明治6年（1873）に当時20歳で札幌にやって来た三島常盤氏の懐古談によると、その始まりは次のようになります。

「明治6、7年であつたかと思うが、旅籠屋渡世侠客松本代吉が、南三条西二丁目に東座というのを建てた。それがきっかけとなつて一杯酒の店が出る。白首が出だすというあんばいで、それ迄の大ヤブであつた地が次第に賑わつて来た。（中略）いたずらにつけた白首小路、即ち狸小路の名がそのまま本名になつてしまったんだから面白い。大ヤブに出る狸で、狸は白首の異名であつた」

明治24年（1891）の『札幌繁昌記』によると「狸小路とは綽名なり、創成川の西側、南二條と三條との間の小路をいふ、この處ろ飲食店とて、西二丁目三丁目にて兩側に軒を比べ、四十余の角行燈影暗き邊、一種異体の怪物、無尻を着る下婢体のもの、唐棧の娘、黒チリ一ツ紋の令嬢のもの、無慮百三四十匹、各衣裳なりに身体を拵ひ、夜な夜な眞面目に白い手をスツクと伸して、北海道へ金庫でも建て様と思ひ込み且つ呑み込み、故郷を威張つて遙々来た、大の男子等を巧に生擒り、財布の底を叩かせる、ハテ怪有な動物かな、その魅力狸よりも上手なれは人々斯くは狸小路となん呼べるなり」とあります。

これらで語られる「白首」とは、「こけ」と読み、昭和30年（1955）の『北海

道方言集』によれば、私娼などを「こけ」と呼ぶのは、新潟秋田・青森地方と同じ方言で、給仕をかねて飲食店などで雇い入れていたようです。

こうした狸と呼ばれた女たちがいたから「狸小路」だというのが、ほぼ定説となつているようです。

北海道各地の狸小路

また、北海道には札幌だけでなく、各地に狸小路がありました。帯広市の狸小路は、帯広駅付近の大通と西一条の伸通りの繁華街のことで、料理店が集中して花街が形成されていました。『帯広市史』などによれば、札幌の狸小路にあやかつたのではないかということです。

ほかにも、小樽の錦町は第二次世界大戦前には遊郭があり、狸小路と呼ばれていました。また小林多喜二の小説によると、手宮にも狸小路があり、長い航海を終えた船員が「手宮の狸小路、稲穂町電器館通へ、この嬉しそうな船員は棧橋や税関のあたりから街へ、街へと駆足でゆく。女と酒のことはまあいいとして、手宮館、富士館、電器館へ船員は『活動写真』をも見にゆく」とあり、電器館通の途中にあつた狸小路は、やはり「女と酒」の街だったようです。

横浜の狸小路

ここで、横浜の狸小路について見てみましょう。横浜駅西口は、国内外を問わず多くの人々が行きかう集客地であり、観光地となつていますが、昭和20年代までは資材置き場が広がる無人駅でした。

そうした横浜駅は区画整理によつて変わり、昭和31年（1956）に狸小路はできました。命名したのは今でも狸小路に店を構える豚肉料理屋の先代で、札幌になつたらしく、花街とは関係ないようです。

ただ、20年近く前に、昭和の当時のことを知る屋台の店主に聞いた話では、横浜駅西口は怖くてとても近寄れなかつたそうです。元プロボクサーでこわもての彼が、一体何を怖がつていたのか…今でも横浜駅西口に立ち寄るたびに思い起こします。

おわりに

さて、狸小路はこのほか、青森や大阪などにもありましたが、おおよそのイメージをつかんでいただけないのではないかと思います。最後に東京の新橋駅東口にあつた狸小路について、前述した由来を史実に基づいて書き換えたものをご紹介して本稿を終えたいと思います。なお、こちらの狸小路については、私が調べた限り私娼を置いた事実はなかったことを申し添えておきます。

「江戸時代の新橋は、大名藩邸が立ち並んだ場所であり、現在の新橋駅東口あたりは豊後岡藩中川家の中屋敷だったが、明治5年（1872）に日蔭町二丁目となった。

明治42年（1909）には、のちに新橋駅と名を改める烏森駅が、日蔭町二丁目のすぐ西側に開業し、現在の新橋駅付近の様相がかとられた。

時は流れ、すべてが灰となった第二次世界大戦後、それは昭和22年



新橋駅前ビル1号館の入口に立つ開運狸

（1947）頃のことだが、この地にY商会によつてマーケットが開かれた。その範圍は、Y商会が賃貸経営を行つていた建物と、その間に位置する「中通り」と呼ばれた平屋の建物3棟であり、史料上では新生商店街と記載されているが、なぜかY商会は狸小路と呼んでいた。

狸小路は人々の憩いの場として愛されたが、昭和39年（1964）の東京オリンピック後に市街地改造事業が行われ、同41年（1966）に狸小路跡地に新橋駅前ビルが竣工した。ただし、Y商会は新橋駅前ビルの区分所有者として賃貸経営をしており、狸小路の店舗のいくつかはビル内に移つて今も営業している。新橋駅前ビル内に小さな飲食店が密集する空間があることは、ありし日の狸小路の名残なのかもしれない。

昭和の面影を色濃く残す新橋駅前ビルではあるが、平成29年（2017）に『新橋駅東口地区再開発協議会』の設立に至り、いずれ姿を改めることになるだろう」

（文：江口知秀）